11月号

NOVEMBER 2026

MJIA
MAGAZINE



江戸川区を訪問した日本インド学生会議のメンバー

公益財団法人日印協会

住　　所：〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6 麹町保坂ビル6階
電 話 番 号： 03-6272-4408
https://www.japan-india.com


世界をつなぐ、あたらしい空へ。
ANA
ANA Inspiration of JAPAN
A STAR ALLIANCE MEMBER
www.ana.co.jp

日印協会は、明治36年（1903年）の設立以来、日印間の政治・経済・文化交流に貢献しています。

目次

第30期日本インド学生会議（JISC）本会議活動報告	4
トリプラ州 紹介	9
第1回コンサルティングセミナー 「インド事業を支えるPublic Affairs戦略」開催報告	11
書籍紹介	12
日印協会からのお知らせ	13
編集後記	14
法人会員一覧	15



国境を越えて働くということ
～日印の若者が描く共生とキャリア～

日印21名の学生が東京・横浜・浜松の現場で掴んだ共生のカタチ
執筆：細井 柚季（日本インド学生会議 第30期実行委員長）

1996年の創設以来、日印両国の学生が相互往来しながら草の根の対話を重ねてきた「日本インド学生会議（JISC）」は、2026年度に第30期という大きな節目を迎えました。本稿では、MJIAをお読みの皆様、とりわけビジネスの現場で日印関係に携わる皆様に向けて、私たちが本会議の現場訪問や企業・自治体ヒアリング、そして4つの分科会での議論を通じて得た「日印が共に働き、暮らすためのリアルな学び」をご報告いたします。

1. はじめに：デリー大学での留学経験から「迎える側」へ

私が初めてインドを訪れたのは2023年のことでした。コルカタ、バラナシ、ガヤ、デリーを巡る旅を経て、2024年8月からはデリー大学に正規留学をしています。インドでの生活を始めたばかりの頃は、住む場所を探すことや、銀行口座を開くこと、日々の買い物さえひとつひとつ誰かに教えてもらう必要があり、そんな右も左もわからない私を数えきれないほどのインド人が温かく迎え入れてくれました。インドで、私は何度も誰かの家に招かれてきました。

「いつか自分も、誰かを迎える側になりたい」。その思いが、第30期実行委員長を引き受けた原点でした。今期は日本人8名、インド人13名の計21名が参加し、8月21日から8月31日までの11日間にわたり「国境を超えて働くということ」というテーマで日本で本会議を開催しました。

2. 駐日インド大使表敬訪問から得た視座

本会議初日（8月21日）、駐日インド大使館にてナグマ・モハメド・マリック駐日インド大使およびウメシュ・ナウティヤル一等書記官と面会する機会を賜りました。チャイとサモサを囲む和やかな雰囲気の中で、大使は学生一人ひとりの名前や所属に目を配りながら、「初の海外渡航となるインド側メンバーは日本で得られる感性を大切にし、同時に自国の文化を日本滞在中に積極的に伝える使命がある」と語られました。



大使はおよそ1時間にわたって私たち学生のために時間を割き、どんな質問にも答えてくださいました。私は実行委員長としてJISCの団体説明をしたほか、これまでのインドでの経験について話し、好奇心の赴くままにマリック大使にたくさん質問させていただいたりしました。すると、大使から

"You spoke too much. Does anyone else have any questions for me? Come on, you are speaking with the ambassador of India. Japanese women, speak up!"

「日本の女性よ、もっと声を上げなさい！」というお言葉が飛んできました。もっと自信を持って自分の考えを伝えていいのだと、背中を押してもらったような気がし、私自身も、大使のような力強い女性になりたいと思いました。また、「日本文化の好きなところや尊敬している部分は何ですか」という大使への質問に対し、オタク文化について熱心に語られたことも印象深いです。何かを常軌を逸するほど愛し、その対象に情熱を注ぐ日本人の姿勢こそ魅力的だと語られました。

3. 企業・自治体・コミュニティ訪問で得た実務的示唆

11日間の本会議では、東京・横浜・浜松を舞台に、外交・産業・自治体・教育・宗教の最前線の現場を訪問し、生の声を伺いました。

（1）ハイコンテキストとローコンテキストの壁を超える「信頼」（横浜インドセンター・横浜市国際交流協会）

横浜インドセンターでは、磯貝富夫理事の進行のもと、ナリン・アドヴァニ会長より「横浜における起業家精神の歴史」を、小林一忠理事・相談員より36年間の海外駐在経験に基づく「日印の企業文化の違い」をご講演いただきました。

続いてお話を伺った横浜市国際交流協会（YOKE）からは、市内小中学校に1万人以上の外国籍児童生徒が在籍する中、日常会話ができても授業で使う「学習言語」の壁が進学の障壁になる課題や、保護者が日本語を話せない家庭への支援の重要性を学びました。



横浜市国際交流協会



横浜インドセンター

（2）ものづくりの現場における受け入れの工夫と生活上の課題（静岡県浜松市・スズキ株式会社）

8月28日には、日印産業交流の象徴である静岡県浜松市を訪問しました。スズキ株式会社の湖西工場では従業員の約30%を外国人が占めており、作業者の負担を減らす工程設計やミスを防ぐ仕組みとともに、インド生産の5ドアジムニーが日本へ逆輸入されるなど、国境を超えた供給体制により生産が成り立っていることを知りました。同時に、現場管理のリアルな難しさも伺いました。導入教育では通訳をつけてトレーニングを行うものの言語の壁は高く、また雇用形態としては派遣・請負が中心であり、地域・言語・文化が多様な人材をまとめる現場マネジメントの苦労や、規律を守れない場合の毅然とした対応など、綺麗事だけではない現場の現実を知りました。社員食堂で本格

的なベジタリアンカレーをご提供いただいた後は、スズキで働くインド出身社員の方々と分科会別のインタビューを行いました。インド人社員の方々からは「社内食堂は配慮されているが、一歩社外に出ると牛肉NGや完全ベジタリアン対応の店が極端に少なく、日本の食品表示にはアレルギー項目に『魚』の記載がないため買い物に苦労する」「平日は仕事があるが、週末に誰とも話す機会がなく『日本のサイレンス（静寂・孤立感)』に馴染めない」といった切実な生活上の課題が語られました。



（3）「働く人だけでなく家族も支える」自治体の包括的支援（浜松市産業部労働政策課・HICE）

浜松市では、市内の外国籍住民約3万1,500人のうち、インド国籍者は655人（4年前の約2倍、10年前の約3.7倍）へと急増しています。浜松市は2年前からインド人材の積極受入れを掲げ、IIT（インド工科大学）への市内企業派遣による採用マッチングや「浜松インディアフェスティバル」を開催しています。特に印象的だったのは、「働く本人だけでなく、その家族を含めたコミュニティづくり」に力を入れている点です。夫婦で来日した場合、配偶者が地域に馴染めず孤立してしまえば、結果として就労者本人も早期帰国を選択せざるを得なくなります。そのため、浜松市では外国人向けに、住民登録時のウェルカムパック配布や家族向け生活オリエンテーションに力を入れているそうです。

翌日に訪問した浜松市国際交流協会（HICE）では、市役所と対等なパートナーシップのもとで現場のニーズを政策に反映させる仕組みや、日本で育つ外国ルーツの子どもたちが日常会話はできても高校受験等の「教科学習の語彙」で壁に直面する現実を学びました。



横浜市国際交流協会（HICE）



浜松市産業部労働政策課

（4）自国の文化を維持できる居場所（江戸川区西葛西・船堀）

8月25日には、「ナマステ江戸川区」代表の近藤祐市様のご案内のもと、在日インド人コミュニティの生活基盤を訪ねました。
まず訪問したTokyo International Public School (TIPS)は、モンテッソーリ教育とケンブリッジ・プライマリーを基盤とするインターナショナルスクールです。校長先生からは在日インド人家庭の子育て事情についてお話を伺い、学校が子どもたちの学びの場であるのに加え、異国で暮らす

母親や家族の孤立を防ぐコミュニティの核としても機能している実態を知りました。
その後は船堀にあるISKCON寺院を訪れ、インド人メンバーに祈りの作法を教わりながら共に礼拝を体験しました。

（5）「神」の概念から合祀の歴史まで（靖国神社）

8月27日には靖國神社を正式参拝し、元海上自衛官（海将）で自衛官出身初の大塚海夫宮司より、日本の「神」の概念と国家神道の歴史、戦後の歴史観の変遷について講話をいただきました。質疑応答ではインド側学生から「不本意に合祀された外国人戦没者の分祀」に関する踏み込んだ質問も出され、政教分離の原則や歴史的基準の難しさについて誠実なご説明をいただきました。また、本殿での玉串奉納・お神酒体験を通じて日本の精神文化への理解を深めました。インド人学生はお神酒に関心を持っていたことが印象的でした。



（6）日本の雇用慣行と文化の違い（慶應義塾大学）

8月27日の夕方には、慶應義塾大学国際関係会「NEXT」の皆様のご協力のもと、同大学三田キャンパスを訪問しました。三田駅からの道すがら東京タワーが見えると、インド側メンバーからは歓声が上がり、歴史ある三田キャンパスの重厚な佇まいや東門の壮大さには「インドの大学とはまったく雰囲気が違う」と驚きの声が聞かれました。まずは図書館旧館（慶應義塾史展示館）を見学し、福沢諭吉翁の足跡や義塾が歩んできた長い歴史に触れました。



その後、同団体の学生とともに分科会議論を行い、慶應義塾大学の学生に対し、「日本の就職活動（新卒一括採用など）の特徴や課題」や「インド人が日本企業で働く際に求められる具体的なスキル」について活発な質疑応答を行いました。また、数年後に日本の大学院への進学を志望しているインド側メンバーもおり、「実際の日本の大学生活や研究環境を具体的にイメージできる貴重な機会になった」と将来への意欲を高めていました。

4. 大浴場と「冷たい紅茶」の衝撃 ――カルチャーショック

本会議期間中は議論やフィールドワークだけではなく、日本の伝統からポップカルチャー、日常の暮らしまで体感する多彩な観光プログラムを実施しました。初日の明治神宮をはじめ、鎌倉（小町通りでの抹茶フロートやおみくじ）、豪徳寺の招き猫、神保町の古本街、川越の蔵造り、さらには秋葉原や浅草などを巡りました。特に印象的だったのは、来日前から日本でやりたいことを書き出していたインド人学生たちが、駅構内のガチャガチャや100円ショップ、ドン・キホーテの便利グッズに目を輝かせ、日本人学生以上に日本のアニメやSNS発の「メイド喫茶（萌え萌えきゅん）」に

詳しく大盛り上がりしていたことです。また、横浜みなとみらいで打ち上げられた花火に「日本の花火を見るのが夢だった」と目を潤ませる姿や、川越で初めての蕎麦・天ぷらに苦戦しながらも「素材の味と旨みが素晴らしい」と味わう姿を通じ、私たち自身も日本の魅力を再発見しました。

カルチャーショックも数多く生まれました。最終日の発表でインド人学生が「１番のカルチャーショック」としてあげたのは、日本の「大浴場」の文化でした。最初は戸惑いながらも、実際に体験した後は「とてもいい体験だった」と笑顔で振り返り、本会議の終盤には個室のシャワールームよりも大浴場を積極的に使用していたのが印象的です。また、日本で当たり前のように出てくる「冷たい紅茶」にも強い衝撃を示していました。温かいチャイが日常であるインドの学生にとって、冷たい紅茶は衝撃的だったようで、「あり得ない」とも感じたようです。

●**食とシェアの文化、ベジタリアン対応の壁：**インドの学生には食べ物や飲み物を自然と周囲と分け合う文化があり、最初は戸惑っていた日本人メンバーも数日後には躊躇なくシェアするようになりました。一方で、秋葉原や都心部であってもベジタリアンやヴィーガン対応の飲食店探しは想像以上に難しく、日本語の成分表示が読めない苦労を痛感しました。特に、ベジタリアンだろうと思って手に取った商品にも、出汁が含まれていることが多く、ベジタリアンのインド人の方にとっては、日本で食べられる食品を探すことは想像以上に大変だろうと察しました。原宿の「AFURI」のヴィーガンラーメンに感激したメンバーが翌日も別店舗を訪れたり、私の実家ではミゾラム出身でノンベジタリアンの学生向けに和牛、ヴィーガンの学生向けに好みの具材を選べる手巻き寿司を用意したりと、食の壁を越えて食卓を囲む工夫を重ねました。
●時間感覚のすり合わせと最終日の感動：準備段階から懸念していた通り、期間中は集合時間に遅れる場面も多々ありましたが、互いのペースを理解し歩み寄りを重ねました。そして帰国日の9月1日、午前4時半チェックアウトという過酷なスケジュールにもかかわらず、初めて全員がほぼ時間通りに集合できた瞬間には大きな感動がありました。羽田空港の保安検査場で見えなくなるまで涙ながらに手を振り合った光景は、国境を越えた友情の証です。

5. おわりに

第30期の活動を振り返ると、私自身の力不足を感じる場面や、異なる考えを持つメンバーの間に立って決断を下す難しさに直面することも少なくありませんでした。しかし、最後まで共に走り抜けてくれた日本側実行委員、遠くインドから参加してくれた13名の仲間、そして30年の歴史を築き支えてくださった先輩方、先生方、企業・団体・受け入れ先の皆様のおかげで、かけがえのない11日間を完走することができました。「国境を超えた友情」という言葉は大袈裟に聞こえるかもしれませんが、別れ際に涙が出るほど大切な仲間が国境の向こう側にできたことは、私にとって紛れもない事実です。
「インドで受けたものを日本で返したい」と思って始めた30期でしたが、活動を終えた今、私が受け取った学びとつながりは、返したものよりも遥かに大きなものでした。私自身にとって、インドは今後何度も再訪する場所であることから、これが最後のお別れではないことは幸いであり、コルカタ、チェンナイ、デリーを訪れるたびに迎えてくれる生涯の友人ができたことは、私にとって何よりの誇りです。
本会議の開催にあたり多大なご支援を賜りました公益財団法人日印協会の皆様、受け入れ先の企業・自治体・関係機関の皆様、そして30年の歴史を繋いでくださった先輩方に、心より御礼申し上げます。第30期で出会った21名の一人ひとりの歩みが、これからの日印関係を築く確かな力となることを願ってやみません。

日本インド学生会議 第30期実行委員長　細井柚季

トリプラ州

概要

＊州都：アガルタラ
＊面積：１０，４９１㎢ （県（District）：８）
＊人口：３,６７３,９１７人（2011年国勢調査）
（2025年推定：約４２０万人）
＊識字率：８７．７５％ (2011年国勢調査)
（2025年推定：９５．６％）
＊宗教別人口比率：ヒンドゥー教（83.4%）、
イスラム教（8.6%）、キリスト教（4.35%）、
仏教（3.4%） (2011年国勢調査)
＊主要言語：ベンガル語（63.4%）、
コクボロック語（トリプラ語：25.9%）、
チャクマ語(2.3%) (2011年国勢調査)
(ベンガル語、英語、トリプラ語が公用語)



政治

（１） 州政府
＊州知事：インドラセナ・レッディ（N. Indrasena Reddy）（2023年10月～）
＊州首相：マニク・サハ（Manik Saha）（2022年5月～）

（２）州議会：一院制（定員６０、2027年３月任期満了）
＊与党：インド人民党（BJP） ３２議席、トリプラ先住民戦線（IPFT） １議席
＊野党：ティプラ統一党（TMP） １３議席、インド共産党(ﾏﾙｸｽ派)（CPI-M） １１議席、
コングレス党（INC） ３議席

（３） 概況
1993年から25年に亘りCPI-Mを中心とする左翼政権が続いたが、2018年3月の州議会選挙では、地域政党IPFTと共闘したBJPが過半数以上の議席を獲得し、B.K. デーヴを州首相とする政権を樹立。2023年選挙でも、前年に州首相となったマニク・サハ率いるBJPが過半数以上を獲得し、政権を維持した。但し、BJP協力政党のIPFTは議席を減じ、藩王の末裔を党首とする新党TMPが野党第一党に躍進した。なお、2014年連邦下院総選挙ではCPI-Mが同州枠の２議席を獲得したが、2019年及び2024年選挙ではBJPが２議席とも獲得した。

経済・産業

（１） 主要指標 （2024/25年度、統計・計画実施省資料に基づく）
＊名目州内総生産（ＧＳＤＰ）：８，９６８．２億ルピー
＊一人当たり名目ＧＳＤＰ：２１３，３７７ルピー
＊実質ＧＳＤＰ成長率：８．７３％
＊州内総付加価値（ＧＳＶＡ）構成比：
第一次産業　４８．１％、第二次産業　９．０％、第三次産業　４２．９％

（２） 概況
州面積の約6割が森林に覆われており、人口の約6割が農業及び農業関連産業に従事している。13万ヘクタールに及ぶゴム農園が拡がり、ケララ州に次ぐインド第２の天然ゴム生産地となっている。また、約1.3万ヘクタールの茶園から7.4千トンを超える茶を生産して、竹や籐を使用した工芸や木材加工が盛んである。
製造業は、非金属鉱物、食品及びゴムの加工・製造などで、州内総付加価値構成比は３％に留まっており、州政府はIT産業の形成と雇用創出を目的としてアガルタラAIシティ及びITパークの開発に乗り出している。相当規模の天然ガス埋蔵量があり、天然ガス利用により州内で発電された電力の大部分が北東部諸州に供給されている。

その他

アショカ王碑文（紀元前3世紀）にもトリプラの言及があり、古くから王国が存続し、英国植民統治下では藩王国としての地位を得ていた。１９４７年のインド独立後、１９４９年にインド連邦に編入され、１９７２年に州となった。

州の北、西、南の三方をバングラデシュとの国境で囲まれていることから、１９４７年のインド・パキスタン分離独立以降、東パキスタン及びバングラデシュより多くのヒンドゥー教徒が移住した経緯がある。

なお、なだらかな丘陵に囲まれた谷間に広がる風光明媚な地であることから、観光地としても魅力がある。



第1回コンサルティングセミナー「インド事業を支えるPublic Affairs戦略」開催報告

当協会は11月4日（水）、日本記者クラブ会見場において、2026年度下期の新シリーズ「コンサルティングセミナー」の第1回「インド事業を支えるPublic Affairs戦略」を開催しました。講師には法人会員であるEdelman Japanから、パブリック＆ガバメント・アフェアーズ部門日本代表の郡裕一氏と、水村太紀氏をお迎えしました。当日は20名にご参加いただきました。

講演ではまず、インド事業においてPublic Affairsが果たす役割が示されました。外国直接投資規制や業種別の許認可、BIS（インド標準規格局）の製品認証など、政策・規制の変化は市場参入から投資判断まで事業の前提を左右します。問題が起きてから当局に説明するのではなく、政策の方向性を先読みし、政府や業界団体と平時から関係を築くことが重要だと強調されました。

続いて、インド特有の政策・ステークホルダー環境が解説されました。日印の貿易総額はFY2025-26に274.7億米ドルと、5年間で約8割増えています。インド国民の97%が日本を「信頼できる」と評価しており、日本への信頼は大きな強みです。一方、インドの政策形成には政府や業界団体だけでなく、SNSやインフルエンサー、消費者団体も影響を及ぼします。銅製錬所が住民運動を背景に閉鎖された事例や、民間団体の衝突試験の公表が独自の安全評価制度「Bharat NCAP」の導入につながった事例が紹介されました。また、州ごとに政権与党や産業集積、優遇措置が異なるため、グジャラート、マハラシュトラ、タミル・ナドゥ、ウッタル・プラデシュの各州を例に、案件ごとに投資環境を確かめる必要性が示されました。

政策・規制課題への取り組み方については、事業への影響度、対応の緊急性、政策形成に関与できる余地を踏まえて優先順位を付けることが提案されました。個別の投資案件では州政府や投資促進機関と直接協議し、業界共通の課題ではCIIやFICCIなどの業界団体や専門家と早い段階から連携する、という使い分けも示されました。

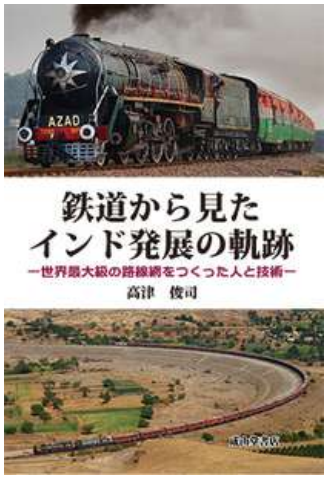
最後に日本企業への示唆として、四つの点が挙げられました。現地で得た政策情報を本社の意思決定に早く反映すること、自社の技術や投資をインドの雇用創出や技術移転と結び付けて伝えること、業界団体や有識者と継続的に対話すること、本社経営層がPublic Affairsの重要性を理解し全社で取り組むことです。

講演後には、参加者から「今後の渉外活動の参考になった」「インド関連業務の意思決定や実務に生かしていきたい」といった、満足度の高い声が寄せられました。

ご協力いただいたEdelman Japanの皆様に、改めて御礼申し上げます。現在、第2回以降を企画中であり、詳細は後日ご案内いたします。



＜書籍紹介＞



『鉄道から見たインド発展の軌跡 世界最大級の路線網をつくった人と技術』

著者：高津俊司著
出版年月日：2026年5月
定価：3,080円（税込）
発行：成山堂書店

本書は，インド初の高速鉄道プロジェクトに関わった鉄道コンサルタントが，鉄道を通してインドの歴史と発展の経緯をまとめたものである。

最初にインド国鉄の概況や日本との鉄道分野の協力関係などが紹介されている。インドは，世界有数の鉄道大国である。現在，環境に配慮した経済的な輸送システムの構築をめざし，全国で各種鉄道計画が進められている。日本からの鉄道分野での協力案件も，デリー・メトロ，インド貨物専用鉄道建設計画、ムンバイ・アーメダバード間高速鉄道計画など拡大しつつある。次に、1853年にアジアで最初に開業したインドの鉄道の歴史を東インド会社統治時代、イギリス植民地時代、独立後のインドの各時代に区分してまとめている。そして、植民地時代までの鉄道整備による波及効果については、特に20世紀以降、鉄道事業の収益は幅広い産業に寄与し，人びとの共同体意識を高め，インド独立運動にも大きな影響を与えたと指摘している。本書は，現地情報や多くの資料を参考に執筆されている。また、写真や図表も多く掲載されており，実務にも有益な資料である。



『インドゴースト探検記 インド工科大学マミ先生もゾクゾク～』

著者：山田真美著
出版年月日：10月27日
定価：2,200円（税込）
発行：笠間書院

インド工科大学ハイデラバード校の客員准教授で、当協会顧問でもある作家・山田真美氏の新著である。前作『ノープロブレムじゃないインド体験記』に続き、今回の主役はインドのゴースト（怪異）だ。幽霊を信じない著者が関心を抱いたきっかけは、約7年前、インパール作戦の地に建つ平和資料館の慰霊祭でのことだった。地元で「日本兵の姿を見た」という証言を耳にした著者は、再びインパールを訪れ、現地の人々に話を聞いていく。

第1章では北東部を巡り、精霊に連れ去られた長老の話などを紹介。第2章では、インド工科大学の学生に幽霊を信じるかを尋ね、宗教や出身地ごとに分析する。インドの「定番」の幽霊も整理され、理工系最高学府の若者が不思議な体験を真顔で語る姿は、合理と信仰が同居する現代インドを映し興味深い。第3章では呪われた砦などの心霊スポットを訪ね、第4章ではデリーを騒がせた「モンキーマン」騒動から集団ヒステリーを読み解く。

本書の魅力は、怪談としての面白さと民俗誌としての確かさを兼ね備えている点だ。出版社が「インド版遠野物語」と評するのもうなずける。とりわけ読者の心に残るのはインパールの章であろう。日本兵の幽霊の証言は、戦争の記憶が今も現地に息づいていることを物語る。幽霊譚を入口に、日印の歴史と慰霊へと思いを至らせる構成は見事である。

インドに関わるすべての方に、そして背筋の寒くなる読書を楽しみたい方にお薦めしたい一冊である。

日印協会からのご案内

第7回　インド・キャリアカフェ



日本放送協会　メディア総局特別主幹、解説委員
藤下 超 氏

プログラム

講演
17：00-17：50
交流会&質疑応答
18：00-19：00
ネットワーキング
19：00-19：30

略歴

1987年	NHK入局　新潟放送局
1992年	報道局国際部
1993～94年	バンコク支局　記者
1996～98年	プノンペン支局長
2003～07年	ジャカルタ支局長
2010～14年	ニューデリー支局長
2016～20年	アジア総局長（バンコク）
2020～21年	解説委員
2021～23年	国際放送局　専任局長　ワールドニュース部長
2024年～	メディア総局特別主幹、解説委員

参加費

日印協会学生会員
無料

非会員
500円

WEBお申込み
はこちらから

https://forms.gle/5DCAax5RsKEBQ1nx8

公益財団法人日印協会

住　所：　〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6 麹町保坂ビル6階
電 話 番 号：　03-6272-4408　　フ ァ ッ ク ス：　03-6272-4135
メ ー ル：　partner@japan-india.com
ホームページ：　https://www.japan-india.com

MJIA(Monthly Japan-India Association)
2026年１1月号（2026年11月27日発行）
発行人：齋木 昭隆　　編集人：三谷 礼子

編集後記～紅茶のお話⑨～SAN-CHAのダージリン3種を比べてみました～

落ち葉舞い散る深秋の候、会員の皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。 今月号の「MJIA」も最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

先日、当会の個人会員で、40年前から「SAN-CHA（サンチャ）」というインド政府の公式ギフトにも選ばれる名門ティーブランドの輸入を手掛けておられるF氏から、3つの季節（スプリング、サマー、オータム）のダージリンティーを頂きました。一度に3種類の飲み比べが出来る！　という事で、早速試飲をしてみました





左から、スプリング、サマー、オータム

この「紅茶のお話」でも何度も取り上げているので皆様も既にご存知だと思いますが、ダージリンは、収穫時期によって驚くほど茶葉、水色、風味が変化します。3つを並べてみると違いがよく分かりますね。春摘みの「スプリング（ファーストフラッシュ）」は、萌え出たばかりの若葉を思わせる爽やかで繊細な香りが特徴です。続く夏摘みの「サマー（セカンドフラッシュ）」は、芳醇なマスカットフレーバーを持ち、「紅茶のシャンパン」と称される力強い味わい。そして秋摘みの「オータム（オータムナル）」は、渋みが少なく、円熟した甘みと深い水色が心に落ち着きを与えてくれます。

季節ごとの恵みがもたらす三者三様の個性を味わえるのは、紅茶好きにとっては至福のひとときです。ちなみに、私は今回サマーが一番美味しく感じました。常務理事S氏は「やっぱりオータムがいいね」との事なので、好みは人それぞれですね。この紅茶を手掛ける「SAN-CHA」は、世田谷にある三軒茶屋の「三茶」・・ではありません（私は最初、そのサンチャだと思っていました）。サンジャイ・カプールさんという紅茶鑑定士が立ち上げられた、インドで最も歴史のあるティーブティックブランドです。今回はF氏がデリー本店に飾られている一枚のプレートの写真も送って下さいました。それは、岡倉天心が、名著『茶の本（The Book of Tea）』の中で記した次の一節が刻印されているものです。



“Tea ennobled into Teaism, a religion of aestheticism, the adoration of the beautiful among everyday facts”（茶は茶道へと高められた。それは日常の些事のなかに美を崇拝する、美的宗教である）　天心が明治の世に西洋に向けて説いた「茶」の哲学と美意識が、時と海を越え、本場インドの由緒あるティーブティックで敬意をもって掲げられている――。日印の文化が「一杯の茶」を通じて深く共鳴し合っている事実に、胸が熱くなります。日々慌ただしく過ぎていく現代ですが、天心の言葉が教えてくれるように、一杯のお茶を淹れるという「日常の些事」のなかにこそ、豊かな美しさが宿っているのかもしれません。 これから年末に向けて慌ただしくなり、寒さも一段と厳しさを増してまいります。どうぞ温かい紅茶でほっと一息つく時間を大切に、健やかな日々をお過ごしください。次号の「MJIA」でまたお会いしましょう。　　（日印協会 三谷礼子）

＜法人会員一覧＞

2026年11月25日現在 (50音順)

複数口法人会員 30社

株式会社IHI
株式会社エイチシーエル・ジャパン
国際縄文学協会
国際スポーツ振興協会
株式会社小松製作所
ジャパンペガサスツアー株式会社
株式会社シンリョー
スズキ株式会社
住友商事株式会社
住友電気工業株式会社
世界開発協力機構
世界芸術文化振興協会
全日本空輸株式会社
ダイキン工業株式会社
第一三共株式会社
有限会社ダイメックス
株式会社TTJ・たちばな出版
株式会社デンソー
一般財団法人東京芸術財団
東洋アルミニウム株式会社
豊田通商株式会社
株式会社日本視聴覚社
東日本旅客鉄道株式会社
株式会社菱法律・経済・政治研究所
公益財団法人フォーリン・プレスセンター
株式会社MIXI
株式会社ミスズ
三井物産株式会社
三菱商事株式会社
武蔵野メディカルシステム株式会社

法人会員 203社

認定特定非営利活動法人アイセック・ジャパン
株式会社IPパートナーズ
株式会社 朝日新聞社
株式会社アシックス
アズカルアセットマネージメント株式会社
有限責任あずさ監査法人
アセアン・ワン株式会社
アーチ株式会社
ARMS株式会社
ALSOK株式会社
A’ALDA PTE. LTD.
株式会社アルファ.JP
株式会社 安藤・間
医療法人社団　育健会
いすゞ自動車株式会社
株式会社伊藤園
伊藤忠商事株式会社
株式会社インフォブリッジマーケティング＆プロモーションズ
株式会社INPEX
インド日本商工会
株式会社ヴィジョンオブヨガ
株式会社ウィンギググローバルサービス・ジャパン
ウェブスタッフ株式会社
弁護士法人 瓜生・糸賀法律事務所
エア・ウォーター株式会社
SMC株式会社
SBSホールディングス株式会社
Edelman Japan株式会社
株式会社エトワール海渡
NRM JAPAN 株式会社
株式会社NGC
株式会社NTTドコモ
株式会社FTO
エンビジョンエンタプライズソリューションジャパン株式会社
沖印友好協会
株式会社 オリエンタルコンサルタンツグローバル
株式会社オリエンタルランド
オーウイル株式会社
株式会社オープンハウスグループ
加賀電子株式会社
鹿島建設株式会社
カナデビア株式会社
カナフレックスコーポレーション株式会社
亀田製菓株式会社
株式会社ガルデリア
株式会社川内美登子・植物代替療法研究所
関西学院大学
キャノン株式会社
クエスト・グローバル・ジャパン株式会社
株式会社クボタ
株式会社熊谷組
蔵町工業株式会社
黒崎播磨株式会社
株式会社グローバルヒューマニー・テック
ケイエフ・トレーディング株式会社
株式会社　啓文社
株式会社 ケー・アンド・エル
株式会社玄海キャピタルマネジメント
鴻池運輸株式会社
株式会社交洋
株式会社講談社
興和株式会社
株式会社国際協力銀行
公益財団法人 国際文化会館
小島国際法律事務所
ジェンパクト株式会社
酒井重工業株式会社
株式会社 サカタのタネ
公益財団法人笹川平和財団
株式会社 サンウェル
山九株式会社
サントリーホールディングス株式会社
JFEスチール株式会社
JGREEN POWER PRIVATE LIMITED
塩浜商事株式会社
株式会社時事通信社
株式会社システムコンサルタント
株式会社静岡ガス
株式会社静岡銀行
有限会社シタァール
品川イーストクリニック
有限会社ジーエストラベル
株式会社商工組合中央金庫
株式会社商船三井
株式会社新日本科学
鈴与株式会社
株式会社住友倉庫
住友重機械工業株式会社
住友不動産株式会社
生活協同組合コープさっぽろ
株式会社西武・プリンスホテルズワールドワイド
積水ハウス株式会社
セコム医療システム株式会社
セイノーホールディングス株式会社
ZEUS LAW
双日株式会社
損害保険ジャパン株式会社
第一生命ホールディングス株式会社
大成建設株式会社
株式会社大創産業
大日本印刷株式会社
株式会社タマイインベストメントエデュケーションズ
地球人.JP株式会社
千代田化工建設株式会社
ティー・アイ・シー協同組合
株式会社ディー・エヌ・エー
TMI総合法律事務所
ティー・ディー・パワーシステムズ・リミテッド
学校法人都築育英学園
株式会社 帝国ホテル
帝人株式会社
株式会社テクノロジーONE
株式会社テレビ朝日
株式会社テレビ東京
TECH　JAPAN　株式会社
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
株式会社東芝
株式会社東横イン
東レ株式会社
戸田建設株式会社
飛島ホールディングス株式会社
トヨタ自動車株式会社
株式会社トピア
内外トランスライン株式会社
鳥飼総合法律事務所
株式会社中村屋
株式会社ナベル
株式会社日新
日東工器株式会社
株式会社ニトリホールディングス
株式会社ニフコ
西村あさひ法律事務所
日印ビジネス支援協会株式会社
日精エー・エス・ビー機械株式会社
NIPPON EXPRESSホールディングス株式会社
税理士法人日本経営
日本信号株式会社
株式会社 日本経済新聞社
日本航空電子工業株式会社
日本航空株式会社
公益財団法人日本交通公社
一般財団法人 日本国際協力センター
日本製鉄株式会社
日本タタ・コンサルタンシー・サービシズ株式会社
日本テレビ放送網株式会社
日本電気株式会社
日本放送協会
株式会社 日本マルコ
日本郵船株式会社
日本電子株式会社
ニルジエックス コンサルティング 株式会社
野村不動産株式会社
野村ホールディングス株式会社
ノリタケ株式会社
ハイカル ジャパン
株式会社博報堂
株式会社 阪急交通社
阪和興業株式会社
株式会社ピーアイ・ジャパン
BEYOND NEXT VENTURES株式会社
株式会社BS日本
株式会社東日本福祉経営サービス
株式会社日立製作所
BLS INTERNATIONAL SERVICES LIMITED
フィデル・テクノロジーズ株式会社
株式会社フジタ
富士フイルム株式会社
富士通株式会社
株式会社フジテレビジョン
富士電機株式会社
BAKER TILLY ASA INDIA LLP
FourS株式会社
株式会社プレジィール
ポラリス・キャピタル・グループ株式会社
株式会社ボルテックス
株式会社マイナビ
株式会社前川製作所
前田建設工業株式会社
松田綜合法律事務所
丸紅株式会社
株式会社みずほ銀行
三井住友海上火災保険株式会社
株式会社三井住友銀行
株式会社三菱総合研究所
三菱重工業株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
株式会社ミツバ
民間外交推進協会（FEC）
株式会社メタルワン
一般社団法人MEDICAL EXCELLENCE JAPAN
森・濱田松本法律事務所
株式会社ヤクルト本社
株式会社安井建築設計事務所
ヤマハ発動機株式会社
ヤマヤエレクトロニクス株式会社
郵船ロジスティクスグローバルマネジメント株式会社
ユーピーエルジャパン合同会社
豫洲短板産業株式会社
読売新聞東京本社
株式会社ライズ・ジャパン
YKK株式会社
医療法人社団和風会

JAPAN AIRLINES



JAL 羽田/成田–デリー線、成田–ベンガルール線
好評運航中!

oneworld member

おかげさまでJALグループは、9年連続で
世界最高品質の5-STAR AIRLINE*に認定されました。
*2026年SKYTRAX社認定

JAL
明日の空へ、日本の翼